〈史料紹介〉

東京府文書「府治類纂　地輿」（その五）

横　山　百合子

史料紹介「東京府文書「府治類纂　地輿」」（その四）（『千葉経済大学論叢』四三号所収）に続き、東京府文書「府治類纂　地輿　第十七冊」（東京都公文書館所蔵　東京府文書、請求番号634. A4. 17）のうち、目次番号六十八～八十八の記事を紹介する。凡例は、（その一）を参照されたい。

『六十八』

『己巳九月八日』

書面船番同心共儀、奥之方ニ自分家作有之、旁町人別ニ加リ請負町地ニ致度旨願出、右は先般御聞済相成候積伺済ニは候得共、請負買下之儀は先不被仰付候ニ付、新開町屋に拝借申付、相当之地代上納致し候様可被仰付哉、此段相伺申候

九月廿七日

前書之外、全上地相成居候分は、同町家持弥十郎其外受負願出有之候間、本文之趣御聞届相成候ハヽ、同様拝借地ニ可被仰付哉、相伺申候

請負地願幷地税高書上

乍恐以書付奉願

一、御船蔵前町元徳川家船蔵番之者共一同奉願上候、私共儀、当三月中より北新堀深川新田島同所万年橋元組屋敷之者共と一同居住之地所請負上納地ニ歎訴仕置候所、外ニは夫々御処置も被仰付候哉ニ承り候得共、今以居住之地所は何之御沙汰無御座候ニ付、当九月五日以書付再願仕候処、谷村官太郎様御応接ニて、是迄之手続等御談示有之、書面御受取ニ相成難有仕合ニ奉存候、依之絵図面差添、地税上納値段奉言上候、乍恐前々奉歎訴候趣を聞召被為分、何卒出格之御憐愍を以願之通被仰付被下置候様、偏ニ奉歎願候、以上

明治二巳年九月

原田身之吉
秋葉和助
鹿野有一郎
宮間作太郎
高橋幾次郎

深川御船蔵前町

元船番用地分上地
（この項、三頁の「壱番」と重複）
壱番

凡九拾坪　　表裏平均地代

見積　　壱坪ニ付　銀壱匁壱分五厘

沽券金九拾五両位

弐拾坪壱分(ト)小間ニ付
金二拾壱両
銀六匁六分六厘六毛
壱坪ニ付
金壱両
銀三匁三分三厘三毛

同断
四番（この項、五頁の「四番」と重複）
凡九拾坪
同断
壱坪ニ付　銀壱匁一分弐厘五毛

リアニ末札ヶ下

深川御船蔵前町
元船番用地分上地
壱番
凡九拾坪
見積
沽券金九拾五両位
弐拾坪壱分(ト)小間ニ付
金二拾壱両

表裏平均地代
壱坪ニ付　銀壱匁壱分五厘

銀六匁六分六厘六毛
壱坪ニ付
金壱両
銀三匁三分三厘三毛

リアニ末札ヶ下

同断　同断　銀壱匁三分六厘

弐　番

凡八拾四坪
見積
沽券金百弐拾両位
弐拾坪壱ト小間ニ付
金弐拾八両二分
銀四匁弐分八厘四毛
壱坪ニ付
金壱両壱分
銀拾匁七分壱厘四毛

同断　同断

三番

凡八拾坪
見積
沽券金八拾壱両位
弐拾坪壱ト小間ニ付
金弐拾両壱分
壱坪ニ付
金壱両
銀七分五厘

同断　銀壱匁一分弐厘五毛

表坪壱坪ニ付
壱ヶ月　銀壱匁八分
裏坪　同断ニ付
同　銀壱匁
壱ヶ年見積
銀壱貫弐百九拾六匁

同断
四番
凡九拾坪
見積
沽券金九拾壱両位
弐拾坪一ト小間ニ付
金弐拾両
銀拾三両三分三厘三毛
壱坪ニ付

同断
同断　銀壱匁一分弐厘五毛

金壱両
銀六分六厘六毛

同断

五番

凡八拾五坪　同断

見積　同断　銀壱匁一分五厘

沽券金　九拾両位
弐拾坪壱ト小間ニ付
金二拾壱両
銀壱匁五分八厘八毛
壱坪ニ付
金壱両
銀三匁五分二厘九毛

同断

六番

凡九拾三坪　同断

見積　同断　銀壱匁一分五厘

沽券金九拾八両位
弐拾坪一ト小間ニ付
金弐拾壱両
銀四匁五分壱厘六毛
壱坪ニ付
金壱両
銀三匁弐分二厘五毛

表坪壱坪ニ付
壱ヶ月　銀壱匁八分
裏坪　同断ニ付
同　銀壱匁
壱ヶ年見積
銀壱貫二百九拾六匁

同断

七番　同断

凡百拾九坪　同断　銀壱匁壱分五厘

見積
沽券金百弐拾六両位
弐拾坪壱ト小間ニ付
金弐拾壱両
銀拾匁五分八厘八毛
壱坪ニ付
金壱両
銀三匁五分弐厘九毛

表坪壱坪ニ付
壱ヶ月　銀壱匁八分
裏坪同断ニ付
同　銀壱匁
壱ヶ年見積
銀壱貫七百拾六匁

同断

八番

凡百拾七坪　　同断

見積　　同断　銀壱匁一分五厘

沽券金　百廿三両位

弐拾坪壱ト小間ニ付

金弐拾壱両

銀壱匁五分三厘六毛

壱坪ニ付

金壱両

銀三匁七厘六毛

表坪壱坪ニ付

壱ヶ月　銀壱匁六分

裏坪同断ニ付

同　　銀九分

壱ヶ年見積

銀壱貫三百七拾七匁三分

同断

九番

凡百三拾弐坪　　同断

見積　　同断　銀壱匁壱分五厘

沽券金　百四拾両位

弐拾坪壱ト小間ニ付

金弐拾壱両

表坪壱坪ニ付

壱ヶ月　銀壱匁六分

裏坪同断ニ付

銀拾弐匁七分弐厘六毛
壱坪ニ付
金壱両
銀三匁六分三厘六毛

同　銀九分
壱ヶ年見積
銀壱貫七百拾匁

右之通最寄沽券地え見競、凡地位取調、此段申上候、以上
巳七月

四拾六番組年寄共

本文上地、都合九ヶ所元船番之もの未た住居罷在、地形も入混居、差向間数相改候儀ニ至兼候間、銘々上地之坪数板札ニ認打付有之、右ヲ以本文ニ申上候

深川御船蔵前町
元船蔵番
荒井金次郎上地
一、九拾坪
此地代　壱ヶ月　銀百三匁五分
但表裏坪平均
壱坪に付　銀壱匁壱分五厘

深川御船蔵前町
家持　弥　十　郎

同

玉安鎌太郎上地
一、八拾四坪
此地代壱ヶ月　銀百拾四匁二分四厘
但同断
壱坪ニ付　銀壱匁三分六厘
同町銭助地借
芳　兵　衛

同
金子豊三郎上地
一、九拾坪
此地代壱ヶ月　銀百壱匁弐分五厘
但同断
同断ニ付　銀壱匁壱分弐厘五毛
同所元町源吉地借
徳　太　郎

同
林次郎吉
一、八拾五坪
此地代壱ヶ月　銀九拾七匁七分五厘
但同断
同断ニ付　銀壱匁壱分五厘
同所御船蔵前町太郎兵衛地借
嘉　兵　衛

同
原田巳之吉上地

一、百三拾弐坪　　同所八名川町家持
此地代壱ヶ月　銀百五拾壱匁八分　　十　兵　衛
但同断
同断ニ付　銀壱匁壱分五厘
右地代、今般願之通新開町屋拝借地ニ被仰付難有奉存候、然上は、町役其外都而町並之通相心得、書面地代之内月々町入用仕払、残金年々七月十二月両度ニ当御府出納方え無相違上納可仕旨被仰渡、奉畏候、為後日、仍如件
明治二巳年十一月四日

深川御船蔵前町
元受領地
一、八拾坪　　同町十兵衛店
此地代壱ヶ月　銀九拾匁　　幾　次　郎
但表裏坪平均
壱坪ニ付　銀壱匁壱分弐厘五毛
同
一、百拾九坪　　同町幸次郎店
此地代壱ヶ月　銀百三拾六匁八分五厘　　有　一　郎
但同断
同断ニ付　銀壱匁壱分五厘

同　　同町銭助店

一、九拾三坪　　作　太　郎

此地代壱ヶ月　銀百六匁九分五厘

但同断

同断ニ付　銀壱匁壱分五厘

同　　同所北六間堀町新蔵店

一、　百拾七坪　　和　　助

此地代壱ヶ月　銀百三拾四匁五分五厘

但同断

同断ニ付　銀壱匁壱分五厘

右は私共儀元船番相勤候節之受領地ニ而、上地相成候所、銘々家作も有之候ニ付、新開屋ニ拝借奉願候処、願之通被仰付難有奉存候、然上は、町役其外都而町並之通相心得、書代之内月々町入用支払、残金年々七月十二月両度ニ当御府出納局え無相違上納可仕旨被仰渡、奉畏候、為後日、仍如件

明治二巳年十二月八日

本所一ノ橋大川端元石置場幷同所地続元鯨船鞘蔵跡共凡千四百六拾五坪余之地所、当時明キ有之候処、須田町弐町目文五郎、本所北松代町壱町目青物渡世勘五郎外七人、同所茅場三町目半四郎外拾五人、本所千歳町五郎兵衛、同所相生町壱町目亀次郎、浅草田原町壱町目六左衛門、千歳町基助都合弐拾九人ニ而買下又は請負地ニ願度段申出候ニ付、取調候処、別紙絵図面並朱引内之通、既ニ納屋小屋等も有之候間、願人共一同呼出し、右場所は買下請負等

ニて不被仰付、東京府附地所ニ而地代上納ヲ以新開町家ニ可相成候間、望之場所は銘々無甲乙地所割合遂示談候上、拝借可相願候、其上ニ而不相当之義も無之、近辺故障も不相聞候得は、地所一同え拝借ニ可被仰付哉之旨可申渡哉、願書類幷地図相添、此段相伺申候

巳九月五日

兼而伺相済候本所一ノ橋脇元石置場幷鯨船鞘蔵跡、道式相除、惣坪千八拾五坪之地所、深川北松町壱町目家持勘五郎外弐拾八人ニ而示談之上、別紙絵図面之通拝借地ニ致し、新開町家取建、地代之義は壱坪ニ付平均銀壱匁二分ツ、之割合を以町入用引去、月々上納仕度段願出候ニ付、地代其外、其外取調候所、不相当之義も不相聞候ニ付、左之通可被仰渡哉、書類相添、此段相窺申候

『六十九』

『己巳九月十二日』

伺

上地相成候町屋敷之義、町人共より買下ケ、又は受負地等ニ致し度旨追々願出有之候得共、右は一切買下ケ受負地ニ不申付、総而東京府附ニいたし、何れも是まて地借共より従来地主え差出来候地代、町入用差引、月々当府え取立可申哉之事

一、同断之地所ニ而、当今皿地之場所え、新規家作取建度旨願出候節は、拝借地ニ申付、地代は当府え取立可申哉之事

伺之通、併難致永続場所は、新規家作取建候義は不差免方可然歟

一、上地相成候町屋敷之内、当時住居人も僅ニ而町入用而已相嵩候場所ハ、建家有之候場所丈ケ沽券地ニ引直し、

其余ハ桑茶可為植付哉之事

一、同断之地所ニ而住居人も無之、皿地相成居家作願人も無之候得は、武家地ニ引直し、桑茶之両種可為植付哉之事

両条、場末ニ候得は、伺之通、其余ハ追々換地之見込も有之故、其儘差置候方可然歟

一、河岸地・原地・野垂地・明地共、新開町家又は物置納屋等取建度旨ニ而、買下ケ受負地等ニいたし度願出候節は、取調差障無之上ハ、拝借町地川岸地等ニいたし、最寄地位見競、地代は当府え取立、家作は願人え可申付哉之事

伺之通、尤本文之通ニ而不都合之場所は、其情実ニ依り可取調事

右之通凡取極置度、尤場所ニ寄候而は夫々見込相附ケ可申上哉ニ候得共、先書面之振合を以今後取調可相伺哉之事

巳九月十二日

『七十』

『己巳十月五日』

芝浜松町四町目吉蔵儀、同町地先河岸地続明地之内、弐拾坪拝借、物置取建度願取調候処、往還其外差障も無之候間、最寄地代ニ見合、壱ヶ月壱坪ニ付銀三分ツヽ上納為致、願之通拝借可申付候哉、書類相添、此段相伺申候

巳十月

芝浜松町四町目地先

河岸地続明地之内

一、　間口弐間

奥行拾間　　壱坪ニ付

此坪弐拾坪

壱ヶ月地代　銀六匁　　銀三分ツ、

右は、今般願之通私え拝借被仰付候ニ付而は、外河岸地並之通相心得、定住火焚所等ニハ決而不仕、都而不取締之儀無之様致し、書面之地代毎年七月十二月両度ニ当御府え上納可仕旨被仰渡、奉畏候、為後日、仍如件

明治二巳年十月日

芝浜松町四町目

政吉地借

吉　蔵

『七十一』

『己巳十月七日』

木挽町四町目

地主惣代

二　三　郎

宗右衛門

其方共所持地面裏之方、間口六拾六間五尺九寸、奥行九尺之地所庇地と唱、旧幕之節より願済ニ而拝借致し居候処、此度改沽券地ニ引直し、年々町入用ニ不拘為冥加金拾両ツ、永年上納致度段願出ルニ付、相糺候処、事実無相違相聞候間、願之通拝借地ニ申付、改沽券地ニ引直、年々為地税金拾両ツ、上納可致

但年々十月中可納

右　町　年　寄

右之通申渡候間、其旨可存

巳十月

市中之明地・野垂地・川岸地・広場等、相当之地税相納、地所拝借町家取立度段願出候節、御一新之上ニ而は、華族方は悉帰国被致、人員も若干相減候事ニ而、昔日之東京と心得候而は往々之見振(据)も無之儀ニ而、追々場末之町家は成丈ケ御郭近辺え被引寄、銘々持久之産業ニ有付候様ニと之深御趣意ニ付、仮令一時生活之助ケニ相成候共、後来之儀篤と勘弁可致旨懇ニ説諭候上、悔悟発明いたし、訴訟下ケ願致シ候分は、速ニ下ケ遣し可申候、且御趣意柄精々申諭候而も、願之通拝借地ニ相成候得は、最寄小前之者も相助り、実ニ往々之生産ニも相成候旨申立候分は、場所見分近辺故障相糺、持久之町家ニも可相成と見据候得は、地税為相納拝借地ニ被仰渡候事ニ取調可相伺哉存候、区々相成候而は不都合ニ付、此段相伺置申候事

十月九日

但、成丈ケ場末は新開町家ニ不申付方ニ可致哉之事

『七十二』

市中之上地又は明キ地・野垂地・河岸地・広場等拝借、町家取建、町入用差引、月々地税相納候分は、追々数口ニ相成候而は自然煩敷有之、殊ニ拝借人共今後不都合勘定等致候も難計、以来右様之類ハ、近町地代町入用精密ニ取調、地代は壱ヶ月何程、町入用は壱ヶ月平均何程と申見極ヲ付差引候得は、全上納高相分リ候間、町入用は平均高ヲ以定式引去リ、壱ヶ年歟二季歟、毎月歟、何程ツヽ永年上納為致候得は、手数も不相懸、煩敷儀有之間敷、尤右様相成候而は、自然拝借人共過当之地代可取立も難計候間、其辺は厳重被仰渡被置候ハヽ、差支有之間鋪と存候ニ付、今後右様之振合ニ取調可相伺哉、此段伺置申候事

十月十四日

但、是迄町入用差引、地税納来候分も取調、本文之通引直可申哉、是又相伺申候

『七十三』

北本所番場町
地面差配人
常　次　郎

其方儀、同町天台宗普賢寺幷東江寺前地先川岸、間口六拾八間、河岸行三間半、惣坪弐百三拾九坪七合五勺之場所拝借、新規町家取建、町入用ニ不拘壱ヶ年金弐拾三両ツヽ上納致し度段願出候ニ付、相糺ス処、不相当之筋も不相聞間、願之通申付

但、町役其外並之通可相勤

右　町　年　寄
四拾四番組中年寄
大　塚　太郎左衛門

右之通申渡間、其旨可存

巳十月十日

『七十四』

世話掛　中年寄共

是迄町人共所持地面を妻娘等之名前ニいたし住居罷在候もの有之候処、今般戸籍法取調候ニ付而は、不都合之儀も有之候間、以後住居致し居候地所は、当人名前ニ早々書替可申

一、是迄家主と唱来候もの共、是又差支之筋有之候間、以後地面差配人と唱替可申

右之趣不洩様早々可申通もの也

巳十月八日

『七十五』

『巳十月廿九日』

深川安宅町受負上納金御猶予願之儀取調候処、最初新開之廉ヲ以、当五月ゟ十月迄六ヶ月之間上納金御猶予も有之候上之儀ニ付、願之趣不被及御沙汰方とも存候得共、一体場広ニ而、地低之所、地形取掛之頃より稀成雨天続ニ而、諸事手遅れ相成、見込外之入費相嵩難之段ハ事実無相違相聞候間、格別之訳を以当十一十二両月分御宥免被成遣、来午正月分より定之通上納可致旨可申渡哉と奉存候、此段相伺申候

巳十月

壱ヶ年受負高

金千弐百三拾五両

壱ヶ月分

金百弐両三分弐朱余

『七十六』

『己巳十月廿八日』

下谷和泉橋通之内、新開町屋ニ致し、町年寄ニ而地代為取集候積別紙之通伺相済候ニ付、猶場所坪数等取調候処、四千五百五坪余有之候ニ付、右町年寄人数増等不申付候而は、迚も行届申間敷哉、同所は去辰以来受負買下等願出候もの別冊之通九人有之候間、一同呼出、坪数少々ニは候得共、拝借相願候哉相糺候上、地所割合拝借申付、町入用差引地代上納仕候様可申渡哉奉存候、此段相伺申候

十月廿八日

下谷和泉橋通武家地ニ而商ひ等致し居候ニ付、新開町屋ニ請負買下ケ願出候処、右場所之内羽倉鋼三郎上地より大

塚鐘太郎上地迄之所は、町屋永続可致見込ニ付、新開町屋ニ致し、請負等は不申付最寄之町え合併為致、町年寄ニ而地代取集メ、町入用差引為相納可申哉、且右之内ニ拝借済之分は上地之儀相達候様可仕、尤請負買下地等ニは不被仰付旨、願人共えは申渡、訴状下遣可申哉、此段相伺申候

十月八日

乍恐以書付御訴奉申上候

一、浅草源空寺門前家主繁蔵奉願上候、和泉橋通り北之方受領地借地之分相除、類焼場幷上納地之分、殊之外荒地ニ相成、甚以見苦敷躰ニ相成候間、此節御改革之折柄乍恐町地ニ奉願上度、御聞済相成候得は、私右地所荒地之分手元ニ而人足ヲ差入、追々荒地直ニ出来仕候得は、夫々私より町人共へ貸附、最寄相応之地代取立、右内ヲ以御下知伺奉上納度奉存候間、何卒御見分被成下、右地受負被仰付候得は、早々取掛、出来之上追々貸附地代上納仕度奉存候間、御聞済之上受負地守役被仰付被成下置候様、奉願上候、以上

但和泉橋通り右橋より町続まて

東之方四拾間程

北之方上野下慶雲寺裏迄

東側ハ上野下関門まて

凡此坪数壱万四千三百坪程

内受領地借地之分相除申候

明治元辰年十一月晦日

浅草源空寺門前

願人　繁蔵

五人組　佐　七印

東京府御裁判所様

『七十七』

深川常盤町壱町目弐町目地先

小名木川通河岸地

一、惣坪百八拾弐坪壱合弐勺三才

壱ヶ月地代

銀弐拾七匁三分壱厘八毛

壱坪ニ付　銀壱分五厘ツヽ

右は、今般願之通私共え拝借被仰付候ニ付而は、外河岸地並之通相心得、定住火焚所等ニは決而不仕、都而不取締之義無之様致し、書面地代毎年七月十二月両度ニ当御府え上納可仕旨被仰渡、奉畏候、為後日、仍如件

明治二巳年十月十四日

深川常盤町壱町目

地　主　鹿　島　清左衛門

久右衛門

藤　太

同町弐町目

地　主　元　兵　衛

『七十九』

『己巳十月廿七日』

本材木町七丁目
家　持　　勝　　三

其方儀、町内河岸自身番屋取払跡会所地三拾五坪之処、拝借願出候ニ付、相糺ス処、差障之筋も無之間、願之通申付ル、河岸地並之通地代上納可致

右　町　年　寄

右之通申渡間、其旨可存

本材木町七町目河岸会所地
一、惣坪三拾五坪
　　壱ヶ月地代
　　銀四拾弐匁
　　壱坪ニ付　銀壱匁弐分ツヽ

右は、今般願之通拝借被仰付候ニ付而は、外河岸地並之通相心得、定住火焚所等ニは決而不仕、都而不取締之儀無之様いたし、書面之地代毎年七月十二月両度ニ当御府え上納可仕旨被仰渡、奉畏候、仍如件

『八十』
『己巳十月廿八日』

神田元柳原町家持善兵衛儀、元柳原岩井町自身番屋取払跡弐拾五坪三合七勺之地所明地ニ相成居、不用心ニ付、所持地面続之儀ニも有之候間、買下度旨別紙之通願出候ニ付、取調候処、町屋相成候而も、往還其外差障之儀も相聞不申候間、買下ケ地之儀は不被及御沙汰、改同人え拝借地ニ申付、地代之儀は壱ヶ月壱坪ニ付銀弐匁之積、町入用

其外差引、年々七月十二月両度ニ当府え相納候様可申渡哉、相伺申候

巳十月

神田元柳原岩井町残地自身番屋

取払跡

表間口四間三尺

一、裏幅弐尺　西之方拾間

奥行　北之方拾壱間

此坪弐拾五坪三合五勺

地代

壱ヶ月　銀五十匁七分四厘

但壱坪ニ付銀弐匁ツヽ

右之地所買下之儀奉願候処、右は不被及御沙汰、改拝借地ニ被仰付難有奉存候、然ル上は、町役其外都而町並之通相心得、書面地代之内、月々町入用仕払、残金年々七月十二月両度ニ、当御府出納方え無相違上納可仕旨被仰渡奉畏候、為後日、仍如件

『八十一』

深川南六間堀町

町年寄　幸　次　郎

其方儀、同町西角明地四拾壱坪、此度新開町屋ニいたし度旨願出ニ付、相糺ス処、差障之筋も無之ニ付、拝借地ニ

申付ル間、町屋取建、町役其外並之通相勤、地代之儀ハ諸入用ニ不拘壱ヶ年金六両、七月十二月半年分ツ、先納可致

右　町年寄

右之通申渡間、其旨可存

十月十四日

『八十二』

『己巳十一月五日』

浅草　諏訪町
同　駒形町
同　材木町
同　山之宿町
同　花川戸町
同　金竜山下瓦町

右六ヶ町川岸野垂地、先般別紙之通伺済之処、先頃より地所改正之御趣意ニ付浮置有之候間、猶勘弁仕候処、右川岸地ハ町屋取立差支無之場所ニ可有之候へとも、寺院にて受負地いたし候ハ不都合とハ乍申、一旦受負被申付上納金迄差出候処、其分ハ指止メ地主共願之趣も有之候へとも、浅草寺願意同様町屋為取立候而ハ、与奪之際浅草寺ニおいてハ不一方苦情相鳴し可申、旁以左案之通夫々え相達、結局いたし、追而東京惣地所改正之上ハ、右川岸冥加金為相増候とも、新開町屋申付候共、御処置候程可然哉と存候間、相伺申候

十月廿九日

申渡

浅草寺別当代
即心院

其寺より、浅草諏訪町外五ヶ町川岸野垂地、町屋ニ作為致度旨、会計局植物方え願立受負致候処、詮議之筋有之、大蔵省え打合之上、右願は差止ル

但会計局え上納いたし候金弐百五拾両ハ渡遣ス

十一月七日

浅草諏訪町
河岸附地主
民部省物産局附属
関　平十郎
外拾人

同駒形町
河岸附地主
か　ゑ
外拾人

同材木町
河岸附地主
寿三郎
外拾四人

同花川戸町
河岸附地主　善　八
外拾八人
同山之宿町
河岸附地主　甚　八
外拾五人
同金竜山下瓦町
河岸附地主　喜　助
外拾六人

其方共所持地先右浅草諏訪町外五ヶ町河岸野垂地、去辰年中会計局植物御用地相成浅草寺え被相任候処、年来納屋物置等補理置候ニ付、此上物置場幷町並家作取立度旨願出ルニ付、相糺ス処、事実無余儀筋も相聞候間、格別之儀ヲ以先在来之通申付、買下ケ又は受負町並家作取建願之儀ハ不及沙汰

但相当之冥加金可相納

右　町　年　寄

右之通申渡間、其旨可存

十一月七日

『八十三』

別紙深川西平野町地先河岸地拝借願之義取調候処、近辺差障之義も無之、最寄地代ニ見合、壱ヶ月壱坪ニ付銀壱分ツヽ上納為致、願之通拝借可申付、相伺申候

巳十一月

深川平野町地先河岸地　善兵衛分

一、　間口弐拾弐間壱尺六寸
　　河岸行弐間
　　此坪　四拾四坪五合三勺
　　地代　壱ヶ月四匁四分五厘三毛
　　但、壱坪ニ付　銀壱分ツヽ、

同断　幸　吉分

一、　間口四拾三間四尺五寸
　　河岸行弐間
　　此坪　八拾七坪半
　　地代　壱ヶ月銀八匁七分五厘
　　但、右同断

右ハ、今般願之通私共え拝借被仰付候ニ付而は、外河岸地並之通相心得、定住火焚等ニは決而不仕、都而不取締之義無之様いたし、書面之地代毎年七月十二月両度ニ当御府出納方え上納可仕旨被仰渡、奉畏候、仍為後日、如件

明治二巳年十一月　深川西平野町
地面差配人　善　兵　衛
幸　吉
町　年　寄

『八十四』
『辰十一月八日』

下柳原同胴(朋)町
家　主
受負人　平　六
米沢町壱町目
同
同　藤　吉
本所弁天門前
吉右衛門地借
証　人　平　七
馬喰町弐丁目
松兵衛地借
同　金　蔵

其方共之内、平六・藤吉儀、同所続新地裏之方両国上之上り場と唱候明地五百六拾五坪余之処、往還道式犬走り等相除、壱ヶ年金百八拾両ツ、上納金を以受負相願ニ付、相紛ス処、不相当之儀も不相聞候ニ付、願之通申付、尤兼而町触之通相心得、右受負場所大切ニ相勤、持場絵図面之通相心得、町入用其外都而町並之通取賄、地代之儀は隣町ニ見合不相当之儀無之様貸附、御法度筋堅相守、火之元厳重ニ申付、都而不取締之儀無之様可致、尤上納金之儀は、年々半年分宛七月朔日十二月十日右定日無相違先納可致、尤地形築立、石垣・堰板・其外普請入用多分相掛ル

趣ニ付、当年分上納金は差免ス

米沢町名主
小　西　喜左衛門

右之通申渡間、支配町々之通相心得、不取締之儀無之様可致

右之通申渡間、其旨可存

右　町　役　人

十一月八日

『八十五』

元大坂町新開町屋地代当十月分可相納処、地代上り高無之候ニ付、当十一月分ゟ相納度段願出、事実無相違相聞候間、願之通可聞届哉、相伺申候

十一月十三日

乍恐以書付奉願上候

一、元大坂町之内、貨幣改所勤末吉勘兵衛外三人拝借地々面差配人三左衛門奉申上候、右御地所之儀、当九月中右四人者え拝借地被仰付、当十月分より地代之内町入用其外掛り高差引、当御府え可相納旨被仰渡候処、当十月分之儀地代上り高無御座候間、当十一月分より上納仕度、此段御聞済被成下置候様奉願上候、以上

明治二巳年十一月十三日

元大坂町
地面差配人
願　人　三左衛門

町年寄　半　次　郎

東京御府

午恐以書付御受奉申上候

一、元大坂町拝借地面差配人三右衛門奉申上候、町入用其外差引上納可仕処、十月分地代無之候ニ付、当十一月分より上納可仕旨奉願上候処、願之通御聞済被成下置、難有仕合に奉存候、依之御受書奉差上候、以上

明治二巳年十一月十七日

元大坂町
地面差配人
三左衛門印
願人
町年寄　善五郎印

東京御府

午恐以書付御届奉申上候

一、元大坂町々年寄三左衛門奉申上候、私とも町内南側元銀座火除地町家被仰付候ニ付、神田御上水請候裏井六ヶ所、新規補理申度段、先月九日当御府え奉願上候処、一昨十五日土木司御役所より御見分有之、同日願之通被仰付候間、此段御届奉申上候、以上

明治二巳年十一月十七日

元大坂町
地面差配人
三左衛門印

町年寄　善　五　郎印

東京御府

『八十六』

『己巳十一月廿三日』

両国西之方橋台脇左右明地に相成居候ニ付、昼之内計り屋台見世差出商内致シ度旨、右橋番請負人拝借助成地商人之内、鶴吉外四人より願出、勘弁いたし候処、窮民之生計ニも相成候儀ニ付、流弊不相成様、全之屋台見世朝夕持運差出候儀は聞届可申哉、相伺申候

十一月廿三日

乍恐以書付御訴訟奉申上候

一、両国橋西橋番請負人拝借助成地商人之内、鶴吉外四人之者奉申上候、私共助成地内ニ而従来其日稼永業仕来、難有仕合ニ奉存候、然ル処、昨辰年九月中御橋台際其外御取払ニ相成候後、銘々営業ニ相離候儀ニ到り、種々変業、日雇等相稼罷在候得共、日々被相雇候儀も無御座、殊ニ雨天之節は往還商ひも難出来、当節柄何分営方差支、必死と難渋仕候間、乍恐右御取払相成候御場所へ、朝暮持運ひ家台見世差置渡世仕度奉願上候、然ル上は、私共一同晴雨共営業不相離暮方ニ相成、莫大之御慈悲と奉存候間、何卒以御憐愍願之通被仰付被成下置候様、偏ニ奉願上候、以上

両国橋西橋番請負人
助成地葭簀張商売罷在候
南本所元町平次郎店

訴訟人　鶴　吉
米沢町壱町目平兵衛店
同　直　吉
同町五兵衛店
同　元　吉
同町　庄兵衛店
同　林　蔵
下柳原同胴(朋)町喜四郎店
弥　吉
両国橋西橋番請負人
米沢町壱町目地所差配人
次郎兵衛
同町平兵衛地借
五三郎

東京御府

乍恐以書付御訴訟奉申上候

一、両国橋西橋番請負人拝借助成地商人之内、鶴吉外四人之者奉申上候、私とも助成地内ニ而従来其日稼永業仕来、難有仕合ニ奉存候、然ル処、昨辰年九月中御橋台際其外御取払ニ相成候後、銘々営業ニ相離候儀ニ到り、種々変

業、日雇等相稼罷在候得共、日々被相雇候儀も無御座候、殊ニ雨天之節は往還商ひも難出来、当節柄何分営方差支必至と難渋仕候間、乍恐右御取払相成候御場所え、朝暮持運ひ家台見世差置渡世仕度奉願上候、然ル上は、私共一同晴雨共営業不相離暮方ニ相成、莫太之御慈悲と奉存候間、何卒以御憐愍願之通被仰付被成下置候様、偏ニ奉願上候、以上

明治二巳年十一月廿日

両国橋西橋番請負人助
成地葭簀張商売罷在候
南本所元町平次郎店
訴訟人　鶴　吉
米沢町壱町目平兵衛店
同　直　吉印
同町五兵衛店
同　元　吉印
同町　庄兵衛店
同　林　蔵印
喜四郎店
同　弥　吉印
両国橋西橋番請負人
米沢町壱町目地所差配人

次郎兵衛印
同町平兵衛地借
五　三　郎印

東京御府

差上申御受書之事

一、両国御橋西橋番助成地葭簀張商人之内、南本所元町平次郎店鶴吉外四人之者奉申上候、私共儀、右御橋台左右え葭簀張見世差出し家業罷在候処、昨辰年九月中御取払相成候御場所え、朝暮持運ヒ家台見セ差置渡世営方仕度段奉願上候処、格別之以御慈悲願之通被仰付、難有仕合奉存候、然ル上は、願之通朝暮持運ひ家台見世差置、外助成地同様葭簀張等補理候儀は不相成旨被仰渡、奉畏候、猶受負人共急度心付、不取締之儀無之様可仕候、依之御受書奉上候処、仍如件

明治二巳年十二月九日

南本所元町平次郎店
願　人　鶴　吉印
米沢町壱町目平兵衛店
同　直　吉印
同町五兵衛店
同　元　吉印
同町　庄兵衛店
同　林　蔵印

下柳原同胴(朋)町喜四郎店
同　弥　吉印
両国橋西橋番請負人
米沢町壱町目地所差配人
同(ママ)　次郎兵衛印
同町平兵衛地借
五三郎印

東京御府

『八十七』

『己巳十一月廿三日』

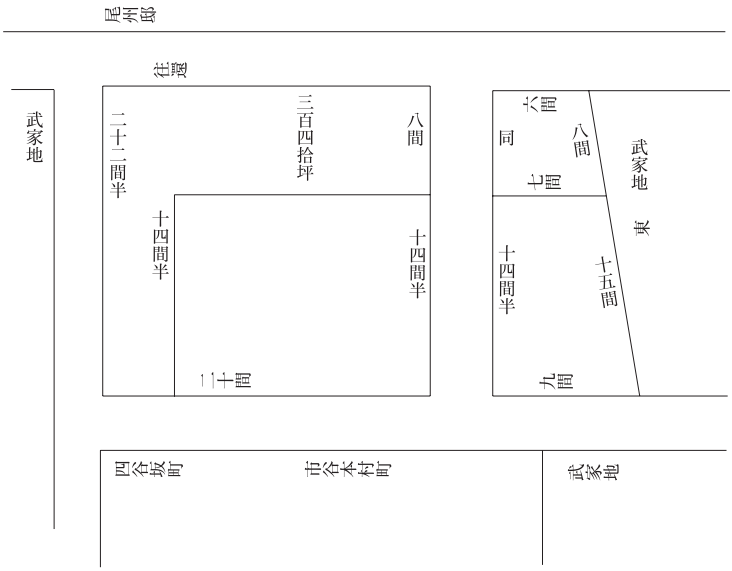
書面元御薬園地幷高田近江拝借地等、町屋ニ致し大病院え地税相納候場所ニ付、過日伺済之通新開町屋ニいたし、最寄区内え組入、拝借主又は年来地守致し居候もの共え願之通更ニ拝借申付、町入用差引、地代上納可申渡哉、且絵図面朱引外は、桑茶植付場ニ物産局え引渡可申候、此段相伺申候

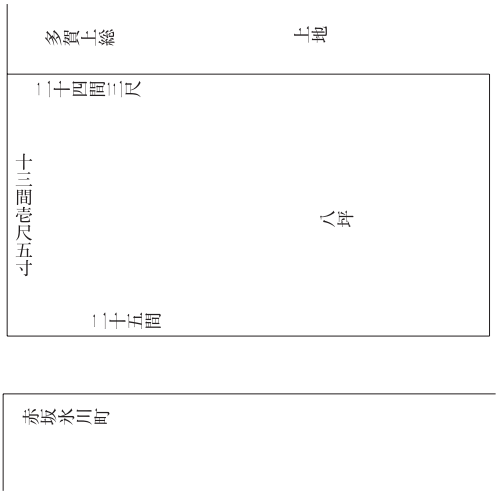
十月

『己巳九月十一日』

医学校より引渡相成候番町其外御薬園幷植物地等之内、請負地等ニ願出候処、右は角地面等ニ而、町家取建有之候分ハ沽券地同様ニ取計、区内年寄ニ進退申付、地代と(ママ)当府え為相納、請負地買下等之儀、追而御規則被建候上は、願出次第取調相伺可申候、植物又は畑地同様に相成居候場所は、桑茶植付或は畑地ニ致度者は、物産局え相願候様可申渡候哉、此段相伺申候

九月


武家地
東
六間
八間
同
七間
十五間
十四間半
九間
武家地
市谷本村町
武家地
八間
三百四拾坪
十四間半
二十間
往還
十四間半
二十二間半
四谷坂町
尾州邸
武家地



乍恐以書付奉願上候

一、赤坂氷川町続元御薬園見守番人忠次郎奉申上候、私義是迄相勤罷在候御地処之儀は、表間口拾三間三尺、裏幅

九間三尺、裏行東之方弐拾五間、西之方弐拾四間三尺、此坪弐百八拾坪四合五勺有之処、前々より私勤中薬種棗目方百目、山梔子百目、為御冥加と金弐両ツヽ相納来候処、去辰十二月中御改正被仰出候間、御地所之内、見守商ひ番家取建候ニ付、壱ヶ年金五両ツヽ之割合ヲ以御上納仕度、願之通御聞済相成、然ル処、今般当御府附相成候段被仰渡奉畏候、右ニ付、御地所之内、表通町並家作取建有之場所町地ニ致、裏残地之分桑茶植附場ニ可奉願上旨被仰渡難有奉存候、私儀植木渡世仕候ニ付、裏地之分庭木植付有之候ニ付、桑茶植附候而は渡世差支候間、何卒一円町地ニ被仰付、私え御預ケ地被成下置候ハヽ、地税壱ヶ年金六両宛上納可仕、且中添年寄支配受、町銘之儀は赤坂氷川町へ合併仕度奉存候、則別紙絵図面相添、此段奉願上候、何卒以御慈悲願之通被仰付被成下置候様、偏ニ奉願上候、以上

明治二巳年十一月二日

赤坂氷川町続
元御薬園見守番人
願人　忠次郎
赤坂氷川町
町年寄　啓次郎

東京御府

糀町三町目
御薬園上地二右衛門拝借願中、新開町屋に可相成場所
壱ヶ月地代

一、　表壱坪ニ付　銀弐匁五分
　　裏同断ニ付　銀壱匁
同所四町目続
同断高田近江拝借願中同断
壱ヶ月地代
一、表裏平均壱坪ニ付　銀弐分五厘
同所善谷寺谷
同断両側高田近江幷喜兵衛拝借願中同断
壱ヶ月地代
一、　表壱坪ニ付　銀壱匁五分
　　裏同断ニ付　弐分五厘
同所
同断喜右衛門・彦兵衛同断
壱ヶ月地代
一、　表壱坪ニ付　銀壱匁弐分
　　裏同断ニ付　銀壱分
右地税ニ而拝借被仰付候ハヽ、相当可仕哉ニ奉存候、最寄地代見合見込申上候、以上

巳十二月　　廿三番組中添年寄
　　松村福次郎

矢部与兵衛

赤坂氷川町続元御薬園附上地、当御府附御地所町屋可相成地代、当時相当表裏坪当取調之儀御沙汰ニ付、左ニ申上候

内

表坪六拾五坪七合五勺　　壱ヶ月壱坪　銀三分

此地代壱ヶ月

銀拾九匁七分三厘

裏坪弐百拾弐坪二合五勺　　同断　　同壱分五厘

此地代壱ヶ月

銀三拾壱匁七分四厘

右上り高之内、壱割路次雪隠地之分引、残高に而町入用凡壱ヶ年百弐拾五匁差引上納相成候得は、相当可仕哉ニ奉存候、取調此段申上候、以上

巳十一月廿八日

廿弐番組

中年寄　内海甚作

添年寄　秋元広之助

一、市谷蓮池元御薬園地湿地之場所相除き、往還より八間と取、踏込五間表坪、残三間裏坪と致、同所続本村町見競に致し候得は、地位表裏地代平均凡弐割五分相劣り申候

一、表坪二百六拾坪
　　壱坪ニ付
　　壱ヶ月地代　平均銀壱匁

一、裏坪百三拾弐坪
　　壱坪ニ付
　　壱ヶ月地代　平均銀五分

リアニ末札ヶ下

右之通ニ而相当と奉存候、依之此段申上候、以上

巳十一月

廿四番組
中年寄
深野長兵衛
添年寄
島田次右衛門

札ヶ下

見競
市ヶ谷本村町
表坪　壱坪に付　地代壱匁三分
裏坪　同　同　七分

麹町三町目続
元御薬園地之内
東側
一、　間口五拾六間　　仁右衛門拝借分
　　裏行拾五間
　　此坪八百四拾坪
西側
　　間口五拾四間
　　裏行拾五間
　　此坪八百拾坪　表坪五百五拾坪
　　裏坪千百拾
　　弐口
合　千六百五拾坪　但　表壱坪ニ付銀弐匁五分
　　裏同断　銀壱匁
　　地代壱ヶ月
　　銀弐貫四百七拾五匁

同町五丁目続東側
同断

間口拾七間三尺
一、裏巾拾五間三尺　　喜右衛門拝借分
裏行三拾八間
表坪　八拾七坪五合
裏坪　五百三拾九坪五合
此坪六百弐拾七坪
地代壱ヶ月
銀百五拾八匁九分五厘　　但　表壱坪　銀壱匁弐分
裏同断　銀壱分

同続
一、間口弐拾弐間　　喜兵衛拝借分
裏行拾間
表坪百拾坪
裏坪百拾坪
此坪二百二十坪
地代壱ヶ月
銀百九拾弐匁五分　　但　表壱坪ニ付銀壱匁五分
裏同断　銀弐分五厘

同町六町目続西側

同断

一、　間口弐拾壱間三尺　　彦兵衛拝借分
　　裏行拾間
　　表坪百七坪五合
　　裏坪同断
　　此坪弐百拾五坪
　　地代壱ヶ月
　　銀百三拾九匁七分五厘　　但　表壱坪ニ付銀壱匁弐分
　　裏同断　　銀壱分

同続

　　間口拾九間三尺
一、　裏巾九間　　高田近江拝借分
　　裏行三拾九間
　　表坪九拾四坪
　　裏坪四百六拾壱坪七合五勺
　　此坪五百五拾五坪五合五勺
　　地代壱ヶ月
　　銀二百五拾六匁四分三厘八毛　　但　表壱坪ニ付銀壱匁五分
　　裏同断　　銀二分五厘

同町四町目続
同断
一、　間口弐間二尺
　　裏巾拾三間三尺
　　南裏行四間目南より北え入込七間、同裏行二拾四間、同前同断入込弐間、同裏行弐拾七間、北裏行五十四間
　　此坪六百六坪
　　地代一ヶ月　但　表裏平均壱坪ニ付銀弐分五厘
　　銀百五拾壱匁五分
右地所願之通私共え拝借地ニ被仰付難有奉存候、然上は、町役其外都而町並之通相心得、書面地代之内、月々町入用支払、残金年々七月十二月両度ニ、当御府出納局え無相違上納可仕旨被仰渡、奉畏候、為後、依而如件

明治二巳年十二月十五日

高田近江拝借分

糀町弐丁目　文八店　仁右衛門
同町五町目　町年寄　喜右衛門
同町弐丁目　儀右衛門店　喜兵衛

市谷蓮池元御薬園地之内

一、　間口弐拾八件
　　裏行八件
　　附　西之方横町
　　間口拾四間半
　　裏行八間
　　此坪三百四拾坪

同続

　　間口六間
一、裏巾七間
　　裏行八間
　　此坪五拾弐坪
　　二口

同町六町目
　　家　持　彦　兵　衛
牛込高田
　　穴八幡
　　高　田　景　昭

合　三百九拾二坪　但　表一坪ニ付銀壱匁
地代壱ヶ月　裏同断　銀五分
銀三百二拾六匁

右地所、今般願之通新開町屋拝借被仰付難有奉存候、然ル上は、町役其外都而町並之通相心得、書面地代之内月々町入用支払、残金年々七月十二月両度に当御府出納御局え無相違可相納旨被仰渡、奉畏候、為後日、仍如件

市谷蓮池
元御薬園
見守番人
吉　五　郎
亀　五　郎

明治二巳年十二月十七日

赤坂氷川町続
元御薬園地
間口拾三間壱尺
裏巾九間三尺
裏行南弐拾五間
北二十四間三尺
此坪　弐百七拾八坪余　但　表市坪ニ付　銀三分
地代壱ヶ月　裏同断　銀壱分五厘

銀五拾壱匁四分七厘

右地所、今般願之通新開町屋拝借地ニ被仰付難有奉存候、然ル上は、町役其外都而町並之通相心得、書面地代之内月々町入用支払、残金年々七月十二月両度ニ当御府出納え無相違可相納旨被仰渡、奉畏候、為後日、仍如件

明治二巳年十二月十七日

赤坂氷川町続
元御薬園
見守番人
忠　次　郎

麹町三町目四町目
五丁目六町目続
御薬園上地之内七ヶ所

右場所新開町屋ニ相成、願人共え拝借被仰付候ニ付、

一、区内続ニ付、私共ニ而支配相心得可申哉

一、右場所之儀、地元町々え合併為致候而も多少区々ニ而不都合ニ有之、壱町立候程聞小間も有之候ニ付、区内え組入相成候ハヽ、不残合併、麹町元園町と相唱候様仕度、町年寄差向壱人住居人より人撰可仕哉

一、町会所積金其外、都而町入用聞小間を立来、午正月より拝借人共より為差出可申哉

一、町火消之儀は、五番組之内や組え合併可為致哉

右之廉々奉伺候、以上

巳十二月十八日　　廿三番組年寄
松村福次郎
矢部与兵衛

附札

書面可為伺之通事

『八十八』

『己巳十一月廿六日』

別紙下柳原同胴(朋)町々年寄金助儀、同町自身番屋跡七拾八坪八合之地所拝借願取調候処、往還其外差障之儀も無之候間、願之通拝借ニ申付、地代之儀は、壱ヶ月壱坪ニ付銀壱匁三分之積、町入用其外差引、年々七月十二月両度ニ当府出納局え相納候様可申渡哉、相伺申候

巳十一月

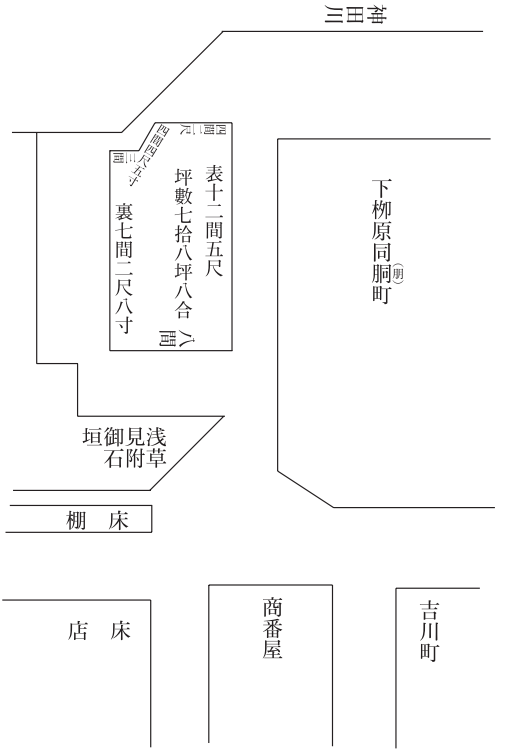
乍恐以書付奉願上候

下柳原同胴(朋)町々年寄金助奉申上候、町内河岸明キ地場所え、旧来自身番屋幷物置等補理有之候処、当節町用向之義ハ町年寄共方ニ而取扱、当時自身番屋不用ニ相成候間、取払候へハ、町入用減方ニも相成候間、右取払跡七拾八坪八合之場所拝借地ニ奉願上度奉存候、左候へは、右地坪地見積、相当之上納金年々七月十二月両度ニ奉上納、此上右場所河岸地掃除、柵手入等、万端不見苦様仕度奉存候間、何卒願之通地所拝借被仰付被下置候様、絵図面相添、此段奉願上候、以上

明治二巳年十一月十七日　　下柳原同胴(朋)町
町年寄

東京御府

願人　金　助
差添　金五郎



（続く）

本稿は、二〇一〇年度科学研究費補助金研究課題番号二〇五二〇九九一「近代移行期都市社会における社会的結合の変容」による成果の一部である。

（よこやま　ゆりこ　本学非常勤講師）